

保育士・幼稚園教諭に求められる
資質能力の向上のための取り組み
—ミュージカル上演活動を通じた成果と課題—

松本香奈, 位田かづ代, 森洋子, 土井のぞみ, 齋藤陽子

岐阜女子大学 文化創造学部

(2015年11月20日受理)

**Approach for improvement of qualities and abilities required for child
care persons and kindergarten teachers**
—Results and problems through the musical presentation activities—

Faculty of Cultural Development,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

MATSUMOTO Kana, INDEN Kazuyo, MORI Yoko,
DOI Nozomi and SAITO Yoko

(Received November 20, 2015)

要 旨

ミュージカル上演活動を通して保育士・幼稚園教諭に求められる資質能力がいかに向上するか、また活動をどのように改善するかということについて明らかにした。本活動の前・後に、1～3年生の学生を対象に資質能力を問うアンケートを実施したところ、向上が見られた主な項目は「自分の行動への責任感」、「何でも挑戦する情熱」、「報告・連絡・相談を実行する力」であった。振り返りの記述と合わせると、必要とされる資質能力を身につけることができたと見える。一方で、計画性と柔軟な対応、情報共有、集団における自分の役割認識、成果を実習等に転化させ継続することが今後の改善点として挙げられた。

<キーワード> ミュージカル上演活動, 資質能力の向上, 成果と課題

I はじめに

初等教育学専攻の学生が「岐女大わくわく劇場」と称してミュージカルを上演して、今年で3回目(大学としては11回目)となる。本ミュージカルのねらいは、保育者及び教員となる学生が、講義等において修得してきた

専門知識や技能、表現力を自らの手で具現化すること、仲間と同じ目標に向かい連携・協力すること(集団としての結束力を高めること)である。このため、作品選び、脚本・衣裳・道具づくり、演出まで、指導教官の助言を得ながら、自分たちで行っている。この過程で学生は子どもの発達段階を考慮したセリ

フを入れて脚本を作成したり、子どもを惹きつける表現(演出)方法を考えたりすることとなる。また、自分が担っている役割を全うするだけでなく、他部署と連携して活動を進めることが必要となる。このことは、保育士・幼稚園教諭となった際に必要なことであると考えており、この活動を通して修得できるよう指導している。

そこで本報告は、ミュージカル上演前・後の学生へのアンケート結果から、本活動において保育士・幼稚園教諭として求められる資質能力がいかに向上したのか、また向上させるために改善すべきことは何かということを明らかにして、次年度の活動及び日頃の学生指導に生かすことを目的とする。

II 保育士・幼稚園教諭に求められる資質能力

変化の激しい時代の中にあり、保育所や幼稚園のおかれる状況にも様々な変化が生じてきている。幼保一元化、認定こども園、子ども・子育て新支援制度など実に様々な施策や方針が出されており、今が変革の時と言える。

そのような変革の時の中にあり、現在、保育士・幼稚園教諭の在り方にも大きな変化が訪れている。それが「保育教諭」の新設である。幼保連携型認定こども園の勤務に必要な保育士資格と幼稚園教諭免許状の両方を併せ持った人材のことを指す(2012、「改正認定こども園法」)。保育という子どもを「育む」力と教育という子どもを「教える」力とを兼ね備えた人材が求められているのである。

そこで、このように保育所・幼稚園で働く人材に求められる力が変化してきている中で、今後学生が「保育教諭」として子どもたちの保育と教育に力を発揮していくためには、どのような資質能力が必要になるのかを

考え、本ミュージカル活動においてその資質能力がどの程度身に付くのかを明らかにしていく必要がある。

本研究では、これまでの保育士の資質能力に関する調査研究を基に17項目の資質能力を示し、それらについて学生がミュージカル活動を行う前と後で、自分自身にそれらの資質能力がどれほど身に付いたかを4段階尺度で回答してもらった。あくまでも自己評価とはなる。

これまでの保育士における資質能力の調査は、保育園の園長や主任保育士、保育士などに尋ねており、これらの調査結果は保育の場が抱く实际的に求められる資質能力であると考えている。

設定した17項目の資質能力は次のとおりである。

表1 資質能力を問う17項目

1	保育士・教諭としての使命感
2	保育・教育への情熱
3	子どもの思いや願いを的確にとらえる洞察力
4	子どもの成長・発達への理解
5	子どもへの愛情
6	保育内容に関する専門的知識
7	豊かな教養
8	クラス経営への知識
9	クラス経営への実践力
10	保健衛生の専門的知識
11	自分の行動への責任感
12	自主的に行動できる力
13	豊かな創造力
14	何でも挑戦する情熱
15	思いやりの心
16	報告・連絡・相談を実行する力
17	豊かな感性

Ⅲ 学生へのアンケート結果

学生には、ミュージカル活動前・後にアンケートを実施した。アンケート項目は、前項で述べた保育士・幼稚園教諭としての資質や能力についての17項目である(表1)。以下、図1~4の「項目○」は表1と対応している。この17項目について、活動を通してどのように変化したかを、1「全く身に付いていない」~4「とても身に付いた」の4件法で調べた。

対象は、ミュージカル活動に参加した学生で、101名(1年生31名, 2年生37名, 3年生33名)より回答を得た。

項目ごとに平均値を算出し、前後の変化を検討するため、平均値の差を計算した。本報告では、平均値の差が0.90ポイント以上の項目について述べる。

(1) 各学年の結果

1年生は他の学年に比べると、前後で変化が大きかった項目が多かった(図1)。変化が大きかった順に抽出すると、項目11「自分の行動への責任感」(1.16ポイント)、項目1「保育士・教諭としての使命感」、項目12「自主的に行動できる力」(ともに0.97ポイント)、項目14「何でも挑戦する情熱」、項目17「豊かな感性」(ともに0.94ポイント)、項目8「クラス経営への知識」、項目9「クラス経営への実践力」(ともに0.90ポイント)であった。

なお、活動前で平均値が最も高かった項目は項目5「子どもへの愛情」(3.23)、活動後に最も平均値が高かった項目は項目2「保育・教育への情熱」と項目11「自分の行動への責任感」でともに3.71であった。

2年生では、全体とほぼ同じ結果であった(図2)。変化が大きかった順に抽出すると、

項目11「自分の行動への責任感」で1.03ポイント高くなっていた。続いて0.95ポイント高くなったのが項目16「報告・連絡・相談を実行する力」、0.92ポイント高くなったのが項目1「保育士・教諭としての使命感」と項目14「何でも挑戦する情熱」であった。

活動前で平均値が最も高かった項目は項目5「子どもへの愛情」(3.03)、活動後に最も平均値が高かった項目も同じく項目5「子どもへの愛情」(3.65)であった。

3年生はポイント順の違いはあるが、全体と同じ項目で変化が大きかった(図3)。順

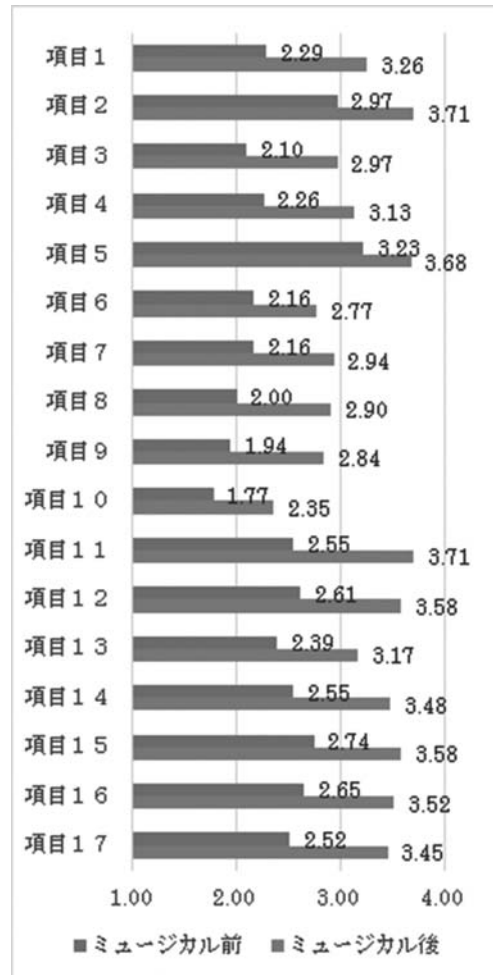


図1 資質・能力の活動前後の比較(1年生)

に、項目16「報告・連絡・相談を実行する力」(0.97ポイント)、項目11「自分の行動への責任感」、項目14「何でも挑戦する情熱」(ともに0.91ポイント)であった。

活動前で平均値が最も高かった項目は項目5「子どもへの愛情」(3.24)、活動後に最も平均値が高かった項目は項目5「子どもへの愛情」と項目16「報告・連絡・相談を実行する力」でともに3.73であった。

(2) 全体の結果

最も変化が大きかったものは項目11「自

分の行動への責任感」で1.03ポイント高くなっていた(図4)。続いて0.92ポイント高くなったのが、項目14「何でも挑戦する情熱」、項目16「報告・連絡・相談を実行する力」であった。

活動前で平均値が最も高かった項目は項目5「子どもへの愛情」(3.16)、活動後に最も平均値が高かった項目も同じく項目5「子どもへの愛情」(3.68)であった。

なお、全体でも各学年でも、項目10「保健衛生の専門的知識」については活動前も低く(全体で1.87)、活動後も大きな変化は見



図2 資質・能力の活動前後の比較(2年生)

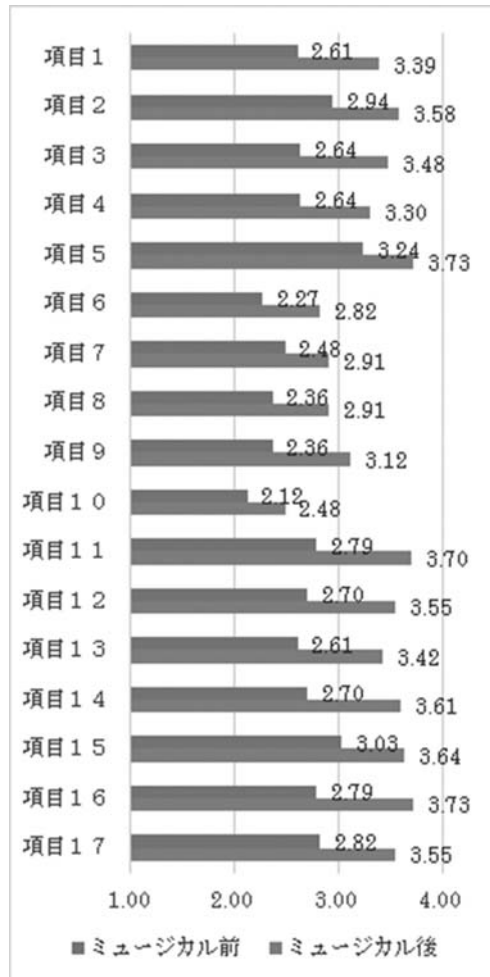


図3 資質・能力の活動前後の比較(3年生)

られなかった。

これらの結果から、ミュージカル活動において学生が身につける資質や能力は、責任感や情熱、報告・連絡・相談を行うこと、自主性であるといえる。

IV 学生の振り返り（自由記述）

【1年生】今年度は昨年のアンケート結果を受け、初めての試みとして1年生が参加できるミュージカル上演に取り組んだ。1年生は、入学後すぐに始まる練習に不安や課題を抱え

てのスタートとなる。

【1年生：自由記述より】

ミュージカルのスタートは不安

・メンバーの一員であるという自覚が持てない。人前でできるのが恥ずかしい。表現の仕方が分からない。子どもが何に興味を示すのか、子どもを引き付けるにはどうしたらいいのか分からない。

練習中盤は、意見交換が多くなる

・先輩の意見を聞きながら演者にアドバイスを進めた。アドバイスは、すぐに改善するようにした。自分も意見を言うが、相手や他の学生の顔を見て、しっかり聞くようにした。みんなが意見を言いやすいように「どう思う？」と話しかけた。ipadで演技を記録し、積極的に意見をだすなど、行動に移した。

工夫や気づきが出てくる

・子どもを楽しませるには、自分が生き生きと演じ、楽しいと感ずること。鏡の前で笑顔を作るなど、自分の表情を確認する。先輩や教師など多くの人にみてもらい、人前で話すことに慣れようと努力する。先輩の練習を見学したり、アドバイスをもらったりすることで、自分達もいいものを作りたいという気持ちが強くなっていった。

ミュージカル上演後は、

・声を大きくするのは勿論であるが、それだけでは相手に伝わらない。体全体を使って表現することを学んだ。一つの目標を皆で取り組む意味が理解できた。ただ、子どもに見せるものを作ることは、簡単でないことを実感した。皆で作る大変さと楽しさから、協調性を学んだ。3か月前に比べて、学生同士の絆が深まった。

【2年生】昨年は、お土産作りや駐車場係などの裏方を担当し、舞台での上演や子どもの前で遊びを提供する経験はない。つまり、2年生は今年が初めての本格的なミュージカル



図4 資質・能力の活動前後の比較（全体）

の取り組みとなる。先輩達の演技を一度も見ていない学生がいる中でスタートする。

【2年生：自由記述より】

スタートは、不安

・担当部署に分かれたが、最初は何をやったらいいいのか分からなかった。キャストだが笑顔がでず、動きがぎこちなかった。頭では理解しているが、実際に演技をやってみようとするすると恥ずかしさのあまり身がすくんでしまった。

中盤は、自分のやりたいことが見えてくる

・将来、子どもの前に立つ人として成長したい。新たな自分を開拓したい。意見を少しでも言えるように取り組む。今までの自分からは想像もできないことにチャレンジしたい。見せる相手は、子どもであることを意識する。

反省点がはっきりしてきた

・演出の意見を押し付けてしまった。人に甘えてばかりで、自分から積極的に行動できなかった。自分には、関係ないと思ってしまう逃げていた。意見をまとめる難しさを身をもって感じた。お客さんになったつもりで、客観的に劇を見なければいけない。自分の仕事に一生懸命になりすぎて、衣装や美術などの各部署間と思うように連携が取れなかった。

ミュージカル上演後は、

・練習を重ねるうちに、真剣さが増し、声ができるようになった。演技をすることが楽しく、表情や言葉の表現を身につけることができた。一つのことをするのに、大勢の人に支えられていると感じた。連携は一方通行ではなく、双方で理解することが大切であることが分かった。

【3年生】 昨年のミュージカルの振り返りとして自分自身の弱点を見つける機会であったと回答していた3年生は、練習開始から、自分の弱さを克服したいと奮起する学生が多

く、それを目標にすることと、昨年以上に良いミュージカルを作りたいとの意気込みがみられるスタートであった。

【3年生：自由記述より】

スタートは、意欲満々

・準備やりハーサルなど、皆がスムーズに動けるような段取りに力を入れた。練習時間より早く行ったり、自分にできる仕事は何か、すばやく動いたりして、周りもスムーズに動けるように周囲をよく見て行動する。人前でのびのびと体を動かし、役に成りきる。昨年の反省点を生かし、積極的に練習や活動等に参加する。

練習中盤は、余裕

・練習中に誰かがふざけると、皆も乗ってしまい時間を無駄にしてしまった。楽しいのはいいが、休憩時間と練習時間の切り替えがしっかり出来なかった。

練習終盤は、慌てる

・実習に出ていた学生が戻ってきたが、セリフや動きを忘れていた。キャスト不在で衣装を制作したため、衣装の変更や直しができなかった。他の部署との連携をこまめにとらなかったため、本番間近になって、不足しているものが出てきて慌てた。

ミュージカル上演後は、

・自分を表現することの楽しさと表現する力がついた。自分に自信がついた。1分1秒を大切に、役になりきった。ミュージカルを通して苦手意識が軽減した。最初は、劇自体が単調であったが、みんなでお互いの演技を見せあい、話し合いを重ねるうちに、動きのある表現力豊かな劇にすることが出来た。言うべきことは言うという環境を作り上げることが出来た。昨年より少ない練習時間の中で工夫して、完成度を上げることができた。団結力が強かった。周りの状況を見て判断し、行動することが出来た。ミュージカルをきっか

けに、様々な方向に意欲を向けることができた。

V 成果と課題

アンケート結果と自由記述より、本活動の成果をまとめる。

(1) 各学年の成果

1年生は、入学直後から数ヶ月しかない状況で活動をスタートさせたことから、当初は不安が大きかったことがうかがえる。しかし、上級生や教員からアドバイスをもらい、仲間同士で意見交換を行うことで、全員で創り上げることで、子ども達に伝わるための表現力、自分の役割への責任感を身につけたといえる。自由記述に「一つのことを皆で作る大変さと楽しさから、協調性を学んだ。3か月前に比べて、学生同士の絆が深まった。」「クラスを一つにするのは難しいが、来年度は最初からみんなの考えや意見をぶつけ合いながら、よりよいものを作っていきたい。」「リーダーを頼りすぎた。周りの状況を把握して動くようにする。」とあったが、このことはⅢで述べた結果にも表れている。他学年とは異なる「自主的に行動できる力」、「豊かな感性」、「クラス経営への知識」、「クラス経営への実践力」といった項目で大きく変化していることが、主体的に行動することや協力して一つの活動を行うことの必要性を体得できたということであろう。入学直後から指導していたことではあるが、実践を通して得られたということが、1年生にとっての本活動の成果といえる。

2年生は、前項にもあるように、ミュージカル自体に携わることが初めてのため、戸惑いを感じながらのスタートであった。台本の修正、全員でのテーマの再認識等を経て、各自の責任感、連携・協力すること、ものごと

に取り組む姿勢を身につけたといえる。Ⅲで述べた変化が大きかった項目と関連する自由記述として、「一つのことをするのに、大勢の人にささえられていると感じた。」「連携は一方通行ではなく、双方で理解することが大切である。」「教員になりたいという気持ちが強くなった。」が挙げられる。3学年の中で最も多く的人数で活動したことから、一人一人が責任感を持つ重要性を感じたといえる。また、専門的な学修が増え、実習を控えた学生もいたことから、将来の保育士・教員としての姿勢を考えることができたとも考えられる。このことが2年生にとって、本活動の成果といえる。

3年生は、これまでの経験を活かして計画的に行い、限られた時間の中で協力して行うことができたようであった。それでも連携不足から直前の修正が必要となることがあったが、全員が自身の役割に責任を持って取り組んだことで乗り越えることができた。自由記述でも、「お互いに前に進むために、言うべきことは言うという環境を作り上げることが出来たため、毎日の練習が充実していたし、昨年より少ない練習時間の中で工夫して、完成度を上げることができた。団結力が強かった。」「全体をしっかりと見渡し、どうするのが一番いいのか考えられるようになった。周りの状況を見て判断し、行動することが出来た。」「ミュージカルをきっかけに、他の教員免許を頑張って取得しようと思った。様々な方向に意欲を向けることができた。」とある。Ⅲの変化が大きかった上位3項目と通じるものがある。実習を経験し、将来について考え、就職活動や採用試験に向けた勉強が本格化する中で自分と向き合う機会が多くなり、保育士・幼稚園教諭として、さらには社会人として必要な力という認識を持てたことが3年生の成果といえる。

(2) 専攻全体の成果

初等教育学専攻全体としては、「自分の行動への責任感」、「何でも挑戦する情熱」、「報告・連絡・相談を実行する力」が変化の大きい上位3項目であった(図1)。これ以外にも、「保育士・教諭としての使命感」「自主的に行動できる力」「子どもの思いや願いを的確にとらえる洞察力」も比較的变化が大きいといえる。自由記述にもこれらのことは反映されていた。この結果から、学生は本活動を通して保育士・教諭として求められる資質能力を向上させたといえる。本活動のねらいはIでも述べたが、「講義等において修得してきた専門知識や技能、表現力を自らの手で具現化すること」である。本活動が、保育士・教諭を養成する上で大きな役割を果たしているといえるであろう。

また、変化は大きくないが、活動前からすでに平均値が高かった項目が、項目5「子どもへの愛情」(3.16)であった。活動後も平均値が最も高くなっている。保育士・教諭として最も基本となるところであり、活動前から高かったことは当然でありながら、活動後にさらに高くなっていることは、本活動で子どものことを考えて制作したり表現したりしたことにより、子どもへの想いをさらに強くしたと考えられる。

(3) 今年度の課題

成果の一方で、課題もある。

成果として挙げた内容に関しても、一部の学生にとっては修得できたとはいえないこともあった。活動に意義を見出せなかった学生は活動にほとんど参加しておらず、声掛けはしていたがあまり変化がなかった。活動の中で自分が必要とされているということや集団の一員であるということに自覚できないままに過ぎてしまったと考えられる。集団として

そのような学生をどのように活動に参加させるか(巻き込むか)ということ全員で考える時間を持てなかったことが課題である。

計画性というところでは、順調なところもあったが、上演直前に変更が必要になったことや、子ども達に渡すお土産づくりが予定通りに進められなかったことがあった。直前に変更とならないよう活動過程で定期的の確認を行うことや、予定通りに進められなくなったときに計画を見直すことが必要である。

役者、美術、衣裳等の部署間での連携が不十分であったところも課題として挙げられる。「報告・連絡・相談を実行する力」は変化が大きかった項目の一つであるが、全員が共通の認識を持てるよう、どのように連携を図ればいいのか、情報共有の機会を持てばいいか、が確立できないままであった。学年間の情報共有もリーダー会を行ったり、リーダー同士で連絡を取り合ったりしていたが、不十分なところもあった。

これらの課題を来年度以降に活かしていかなければならない。

VI おわりに (今後に向けて)

本活動を通して、学生は保育士・教諭として必要とされる資質能力を向上させていった。集団としては、上演に向けて一致団結し、計画的に物事を進めていくこと、それにより達成感を得られた。個人としては、集団の一員として自分が何をすべきかを考え、全体の動きを察知しながら自分の動きに活かしていくことも行動としてできるようになってきている。演じるという表現力とは何か、についても深めることができた。

今後、本活動をさらに充実させるために、以下のことが課題として挙げられる。

- ①計画的に進めること、柔軟に対応すること

- ②同学年だけでなく、学年間（全体）で情報を共有すること
- ③全学生が自分の役割を認識し、参加する意義、達成感を感じることができること
- ④本活動で得たことを他の学修や実習に転化させ継続すること

本活動における今年度の成果と課題を専攻教員も共有し、来年度の活動に繋げていく。

<参考文献>

- ・江田美代子, 「保育士に求められる資質能力に関する調査研究」, 宮崎女子短期大学紀要34, pp. 31-46, 2007
- ・中平絢子・馬場訓子・高橋敏之, 「保育所保育における保育士の資質の問題点と課題」, 岡山大学教師教育開発センター紀要第3号, pp. 52-60, 2013

